

資本主義のカルト

自己宗教・魔術・ビジネスの強化

ポール・ヒーラス

岡松龍一 訳

一、はじめに

不思議なことに、研究者たちは、これまで新宗教運動と資本主義的企業の関係についてはほとんど注意を払ってこなかった。しかし、職業の意味、とりわけ職業倫理と動機づけの意味をめぐる伝統あるウェーバー的な関心が、無視されてよいはずがない。結局のところ、新宗教運動に参加している大多数の人たちは、日常の時間のほとんどを経済的な生産活動に費やしているのである。現在、新宗教と経済活動について、少しは研究が発表され

てきており、とくにリチャードソン (J. Richardson: 1988) の研究は著名であるけれども、多くの問題がまだ手つかずに残っている。

西欧の「ニューエイジ」宗教にみられるもつとも重要な特徴の一つは、自己 (the Self) そのものを、至高のもの、すなわち神の究極的な場とするものである。「エスト (est: Erhard Seminars Training)」という組織は、私が自己宗教 (self religion) と呼ぶもののうちで最も重要な組織である。こうした宗教運動は、ここ十年ぐらいのあいだに、しだいにビジネス界の大勢に関心を向けてきて



いる。それにともない、自己宗教は資本主義に根元から汚染され、実際は少しも宗教的ではないとまでいわれるようになっていく。こうした運動は、基本的に、資本主義のビジネスの主流での成功にかかわっていくのだろうか、それとも、まず関心を宗教的なものに向けていくのだろうか。この問題は、マーヴィン・ハリス(Marvin Harris)が取り上げている。ハリスは、こうした運動は功利的目標に捧げられているという見方を最も強く打ち出して、詳しく研究している一人である。

ハリスは指摘する。「より『霊化され』、宗教化された『トレーニング』のうちで繰り返されるテーマは、物質に対する心の優位に關してである。人々は自身の制御に上達することで他人を制御することを目論むだけでなく、物質に自分たちの思考を押し付けることで物質的なものを制御しようとする。たとえば『エスト』では、思考は全世界を構成する基礎的な素材であると主張する。自らの思考にいかに関心をもちかを学び、また、イベントでそれをいかに押しつけるかを学べば、『エスト』の設立者であるウェルナー・エアハルト(Werner Erhard)

ように現世で成功するだろう」(1981: 147)。
アンソニー・クレアー(Anthony Clare)は、もっと激烈く、「こうしたすべてのカルトはカネを儲けるだけだ」(Bernan 1983: 12による引用)と主張している。新宗教は嘘と欺瞞の上に奴隷労働を使ってカネと権力を手に入れようとしているという主張は、数多くみられる。たしかに、自己宗教はこの世の成功を提供し、それが解放かつ魔術的パワーは「ヤッピー」が抱く野望に利用されているように見える。したがって、魔術的功利主義の仮面をかぶってはいるけれども、自己宗教者を資本主義者とみるのはたやすいことである。

私の目的は、自己宗教が伝統的なビジネス界と密接につながっているとみる主張を崩すことにある。議論の中心は、魔術の本質をめぐめるものである。魔術の実践がビジネス活動と異なっているのは、(その目的からいえば伝統的ではあるが)これまでにない非伝統的なテクノロジーのためなのか、それとも、市場にまつわるなにか重要な非資本主義的なビジョンに縛られているからなのだろうか。前者の見解に立てば、人々の活動と目標のもつ宗教

的意義や、功利的成功のために魔術的テクノロジーが使われるべきではないとされる意味を正しく評価しなくなる。非常に大きなことであると思うのだが、人々が理解していることに注目してみれば、資本主義の中で仕事を強化し、成果を得るために自己宗教がもつ市場での宗教的ダイナミクス、とくに「自己」に備わる魔術的パワーが、いかに機能しているかについて、およそ異なった光景が現れてくるのである。

この主張は、限定的に考えられなければならない。というのも、適切な調査がないために、どれほど多くの自己宗教者が、世俗的目標だけに關わる誘惑に強く反対しているかはいえないからである。それにもかかわらず、「エスト」と「イクシジシス・プログラムズ」(Exegesis/Programmes)〔以下、「プログラムズ」と略称〕の二つの運動についての資料は、カルトの資本主義の本質をめぐる重大な問題を提起しており、また、自己宗教全体に無造作に適用することができない問題も示しているのである。自己宗教、職業、資本主義についての比較的詳細な情報は、これら二つの運動に限られているとい

えよう。「エスト」はスティーブン・ティプトン(Steven Tipton)が研究し、「プログラムズ」は私が研究してきた。ティプトンの研究成果はすでに入手できるようにになっているので(1982a, 1982b, 1983, 1989)、私は、ロンドンを拠点とした、ビジネスとつながった自己宗教である「プログラムズ」について主に述べることにする。とはいえ、ティプトンの分析は、ここでの議論に有益な支持を与えるものである。

最後になるが、宗教的な準拠は過小評価されるべきではないが、それがなにか存在論的なことならと関連していると考えられてもならない。社会科学者は、当事者が理解していることに関心をもちつべきであって、彼らの宗教的主張の究極的真理にまで関心をもちつべきではないのである(Thompson and Heelas, 1986を参照)。

二、自己宗教

最初に、まだあまり知られていない自己宗教について手短かに述べておく(Rhinehart, 1976, Heelas, 1982, 1985, 1987, 1990を参照)。「エスト」は自己宗教の範例と考え

られる。というのは、それは、主として西欧の精神療法の伝統からとられた「プロセス」を使って、「神としての自己」の経験を啓発しようとする、最大で最有力の運動だからである。

「エスト」のセミナーは人々を自己へと導く。「エスト」はアメリカ人であるウエルナー・エアハルトの靈感によって創始され、一九七一年から（ロンドンでは一九七七年から）一九八四年十二月の「活動停止」まで行われたトランスフォーメーションナルなイベントである。この期間中、五十万人の人々が六十時間ほどの「教育」セミナーに参加し、各々が、たとえば一九八三年には四百ドルを支払った。「エスト」の出版物である『ネットワーク・レビュー』（The Network Review）によれば、「過去十三年の間、その他に二百万人の人々が、ワークショップや特別イベント、およびセミナーでのトランスフォーメーションに参加した」（同誌、一九八五年一月）という。「エスト」が終了した後、たとえば「フォーラム（The Forum）」のような形で、エアハルトの道は引き継がれた。そのあとに生まれた自己宗教は、その設立者たちが「エスト」

を「修了している」ことから、じかにエストの影響下にある。

自己宗教の本質について、エアハルトとジョシア（V.Gioscia）は次のように述べている。「エスト」のトレーニングでは、人生のさまざまな体験が、あなた自身の空間の中で人生本来の道を生み出す体験へと変化するのである。人生のさまざまな体験とは、このように生まれ、人生に苦しみ、人生に耐え、その犠牲者になつていくという体験、よくてもせいぜい人生の重荷を克服して成功したという体験である。」（1977: 110）。トランスフォーメーションナルな「変化」とは、社会化によって（「エゴ」や「心」といったものが目立つようになるつまらない「機械的な」生き方から、「完全」なものが文字どおり「生まれる」生き方へと変わることである。

体験について、エアハルトとジョシアは次のように指摘する。「あなたであるという体験は、本来、十分満足できるものである。もし現実のあなたが、健康や幸せ、愛や十分な自己表現——あるいは「生きていること」——を経験していないとすれば、それは本当のあなたで

はない。あなたは自己を自己として体験すれば、その体験は本来的に満足できるものになる。自己としての自己の体験は、満足の経験である。それ以上でも、それ以下でもないのである。」（1977: 111）。

「生きていること」の体験は、ありふれた日常の、これまで経験されてきた現実の（信念、規則、仕事などといった）「具体的内容」への愛着とか関与といったこととは相いれないものである。「生きていること」あるいは「啓発すること」は、「自己を脱すること（de-identification）」を求める。エアハルトは、セミナーで、「人は自分の心と体を脱し、自分の情動、諸問題、幻影から脱して、自分が単なる役目（the Play）でないことを理解し始めるのだ」と述べている（1974: 3）。

三、悪魔の擁護

自己宗教が資本主義の精神にかおれているとの主張に十分に反駁するためには、事実を直視しなければならぬ。たしかに、これまで指摘されたカルトの資本主義の本質をめぐる問題は決して受け入れがたいものではな

い。カルトのビジネス活動は重要であり、その結果は重大であり、そしてそこには魔術が際立っているのである。ビジネス活動は、三つの形態をとる。セミナー修了者は団結して新しい企業を起こし、（とくにマネージメントとセミナーに似たトレーニングといった）サービスを企業に提供する。そして、企業は自己宗教に「改宗」し、その社員はトランスフォーメーションのセミナーを受けて、仕事に戻り、周囲の者がセミナーに行くのを奨励する。修了者はセミナーや他の活動を行いながらも、自己宗教自身は、「ビジネス」企業として機能するのである。

いくつかの会社で構成されている「プログラム・グループ」は、三つの形態のうちの最初の例である。百八十人の従業員のほぼすべては、「プログラムズ」の修了者である（とくに指摘のない場合は、「プログラムズ」に関する資料は、私が調査を行った一九八〇年代半ばのものである）。修了者の多くは、一九八一年にドビグニ（Daubigny）の援助で創立された電話での販売会社であるプログラムズ社に採用されている。またプログラムズ・トレーニング社にいる者はIBM、ダイハツ、ウイトブレッドとい

った主流の会社に、訪問販売やコミュニケーション、マネージメントのトレーニングを提供したり、モデルや販売促進の代理店として、「エキシビションニスト」(The Exhibitionists)や「ロアー・ミュージック」(Roar Music)で働いている。

「プログラムズ・グループ」は、たしかに成功した事業といえる。「プログラムズ・グループ」の事業は、二年ほど前に英国産業連盟に注目され「企業」と認定されたが、これは同社がヨーロッパ最大の電話での販売代理店にまで急速に拡大したためだけではないのである。同社の事業は、他のビジネスマンから賞賛を得て、たとえば一九八四年には英国直販協会 (British Direct Marketing Association) の電話販売賞の上位三賞を受賞している。また同社の事業は、成果を得るために全力を尽くして働く非常に情熱ある人材で固められている。実際、私が「プログラムズ・グループ」を調査しているとき、ドビグニイは、メンバーに遅くまで仕事をしないで、午後六時には切り上げなくてはならないと語っていたほどである。第二の形態として、「エスト」それ自体が、本来、相

当な「ビジネス」であることも忘れてはいけない。ティプトンにいわせれば、それは最初から、現代のビジネス界から直接に由来する法制的、財政的、管理的構造を持っている「人間の潜在力」の運動なのである(1988: 223)。ローゼン(R. Rosen)は、『「エスト」とアメリカのビジネスの類似点」について論じ、この組織は「厳格なトップダウンの構造」を持っていると述べている(1978: 50)。さらに、カルトの資本主義の本質をめぐる問題は、魔術が果たす役割によって明らかにする。自己宗教の修了者は、世界に起ることは、それについて単に体験するという点だけではなく——自己自体に依存しており、「自己」がパワーをもつとよくいう。それは因果の科学的な理解を超え得るという意味である。それで「プログラムズ」のメンバーは、「結果に(at effect)」あって、心によって生きているのとは反対に、「原因に(at cause)」あって、「源(source)」によって生きているときには「自己」自体であり、そのとき、生起してくる出来事は完全な「自己」とおのずと「一致」するという。「エスト」はまさに魔術的なものである。セミナー講師は参加者に

「私の意識は、鉱物、動物、人間や宇宙の領域にも、いつでも、いかなる天体にも、宇宙のどこにでも浸入できる」とはつきり説明している(Garvey 1980)。ティプトンがいつているように「個人の内的状態が、それを映し出す外的達成を決定づけるのである」(1982b: 14)。

第三の形態として、カルトの資本主義の本質を明らかにするいくつかの明確な証拠は、自己宗教が将来大きな成功を約束しているようにみえること、また企業努力を明に暗に謳っていることに見いだせる。「プログラムズ」の手引書である『イクシジシス・プログラムズ』には、セミナーは「選択された目標のすべてに向って(参加者の)エネルギーを解放し、方向づける」ためのものであると主張している。ツェムケ(R. Ziemke)は、エアハルトが「共同市場での」フォーラムを「目指し」ていたと書いている(1987: 26)。事実、一九八八年の手引書には「フォーラムの魔術」、「あなたの個人的努力がみるみる実り、あなたの能力が完全に開発されることを約束」する「あるがままであること」の魔術に言及している。エアハルトは、『「エスト」の組織原理は、世界がなにを成そうとそ

れを成さしめよ、である」と主張している(Bartley 1978: 21による引用)。ティプトンは、『「エスト」について、「もし個人が自身の真実の内的自己を実現するなら、……その人はどのようなことでも成し遂げ、手に入れることができる」(1982a: 11)と報告している。

別の見方によれば、自己宗教は、『「なんでも欲しがり」続ける市場の中で「成長した六〇年代の精神」、すなわち、ケン・ウィルバー(Ken Wilber)がいう「ニューエイジのヤッピー」のような、世間でさらに成功する道を模索しそうな人たちをよく魅了するのである(1987: 11さらにWallis 1984: 28-9を参照)。ライフスタイルを向上させようとの期待をもつかからは、ひとたびセミナーで魔術が体験されるや否や、それを功利的に使いたいと思ひ、また、もっと手軽に成功するために魔術を使いたいと思うだろう。こうして、一九八〇年代には、消費指向の自己宗教は、意味の価値を捜し求めて集ってきた人たちより、もっとビジネスの主流に関心を向けている消費指向の人々を募る傾向があった。(後半の点については、ティプトン 1982a: 180-186, 1982b: 191-2, 1983: 72をみ

よ)。たしかに、オークランドの「フォーラム」でレガ(Leah)がみた「都市」のスマートなデザイナーたち、ファッション界や演劇やマスコミに携わる人たちを含む三、四十代の「みたところ順調そう」な人々が、人生での成功に「愛着を持つこと」は、真の生き方ではないという「フォーラム」のメッセージを受け入れるのは当然である。しかし、少し長い目でみれば、結局、こうした人々は人生への愛着が目につくようになるのも当然である。というのは、たとえ彼らが自身のパワーを体験したとしても、他の人びとも自分たちの競争を強化するために魔術を使うだろうからである。

四、魔術の本質と役割、および資本主義の強化

もし、多くの自己宗教者が魔術的功利主義者となりうることを、市場での効用という点で自己宗教はパワーの本質を規定しているとかれらが考える可能性を認めないとするれば、それは軽率というものだろう。しかしながら、自己宗教者が、そのシステムの「内部」で働き、したが

って「成功」を望んでいるという点では「資本主義者」であっても、資本主義自体に関与しないという点では資本主義者でないのははっきりしている。この点を「プログラムズ」について考えてみると、核心となるのは、人々が、自分たちは「ビジネスのトランスフォーメーション」に携わっており、またさまざまな影響を与えてきたといっていることである。そのトランスフォーメーションとは、ビジネス環境のなかでの文字どおりの宗教性の適用、深化である。仕事の意味、つまりかれらが何を目指して働いているのか(かれらの職業倫理)や、かれらがどのように(魔術の本質と役割を含む)仕事のダイナミクスを理解しているのかは、こうした脈絡から理解されねばならない。成功とその方法は、「資本主義的」ダイナミクスとつながった宗教的ダイナミクス、価値、そして究極的には存在論に規定されるのである。

ビジネスのトランスフォーメーションとは、ドビグニイが私にいったように、「セミナーの訓練が活かされる場」である学習環境の中で、ビジネス活動が自分自身に「働きかける」機会を提供すると考えることである。こ

うしたビジネス活動は、人々が究極的に価値があるもの、すなわち内在する神を発見し、体験するのに役立つ。これがドビグニイが「個人の真の欲求に組織がいかに応えるか」と語ったときに、念頭においていたことなのである(BBC1放送「ニュースナイト(Newsnight)」, 1983)。もう一人の中心人物であるキム・コー(Kim Coe)が同じ研修の中で、同様のことをいっている。すなわち、「われわれが行い、この組織が依っている思想・原理とは、唯一の満足は個人が成長するという経験であり、それへの挑戦にあるということである。もし、あなたが、ここ「プログラムズ」でただ単に職をもつだけなら、周りをとてもつまらなく思うだろう。ここは、成長し学ぶための環境なのである」と(Erhardを参照。Tiptonの引用。1983: 76)。

人々が伝統的なビジネス活動に関心を寄せないなら、ビジネスは学習環境として働くのみである。伝統的な「富の世界」への関心は、エゴの発動を刺激し、それゆえ自己実現の障害となるだけである。資本主義システムの中で動く人々が、どうしてそれと関わらないことができよ

うか。答えはこうである。ビジネスの「具体的内容」、つまり資本主義的企業の密接な協働は多少変わらずに残っているが、それは、伝統的な関心を排する「脈絡」——「自己」——から経験されなくてはならないということである。(さらに「エスト」自体を明確に述べたものについては、Erhard and Gioia, 1977: 12; Tipton, 1982b: 198; そしてエストの手引書 *Questions People Ask about the est Training* を参照)。

最後に、私が一元論的自己職業倫理(monistic self-work ethic)と呼ぶ、トランスフォームされたビジネス生活の職業倫理は、ビジネスの場を強化するという点について述べよう。「プログラムズ」で働く自己宗教者たちは、実際、電話セールスや他の仕事で極端なまでに懸命に働くが、それは、物質的な関心を伴った功利的倫理のためではない。こうした努力は、仕事が自己実現という目的のための重要な手段であるということで、正当化されている。

要するに、ビジネスのトランスフォーメーションとは、人々が資本主義的なものとそれに絡むエゴを発動させな

いで、会社にとって生産的に働きながらも、究極の価値である自己実現のためにも働くことを可能にするものといえるのである。

自己実現が「プログラムズ」での究極的価値であることを示す具体的な証拠がある。従業員のはば全員が答えた質問表は、その四分の三が自己宗教をはっきりと表明している。典型的なものとしては、「私は、ただ私を通しての神を信じています。私は私自身の神なのです」というのがある。面接調査では、大多数の人が、この上なく熱心に自らの一元論的探求の重要性を強調している。「プログラムズ」にいるほとんどの人々は、伝統的な見方からすれば、他の会社で、もっと魅力的で、刺激的な仕事をして、もっと稼げる人たちであろう。すでに世間で成功した人が多い教育水準の高い従業員たちは、たしかに、電話セールスをするには十分すぎるほどに洗練されている。もし、伝統的な人生の希望を優先させるならば、電話でのセールスには従事しなかったであろう。

「プログラムズ」での仕事の意味が明らかに変わったところで、その仕事がいかに魔術的になり、「資本主義」

の強化に役割を果たすのかをみてみることにしよう。トランスフォーメーション的な脈絡からすれば、資本主義の観点から本質的に価値づけられた目標を達成する近道としてパワーが使われるべきではないことは明らかである。実際、ビジネスをしているときに、「原因にしていることはできないから、功利的目的に用いられた魔術は結果を生まない。また、いわば魔術的パワーを商品にすれば、それに「依存している」ことで批判される。ここで難問が生じる——魔術に残された役割についての問題である。いま述べてきたことは、魔術が「資本主義的」な目的のための手段として価値がないといっているのではない。魔術に伴う仕事の金銭的報酬は重要であり、それは、少なくとも「プログラムズ」が社会の全体をトランスフォームする収入を得るためには十分認められるからである (Heelas, 1987: 21 および 1986 を参照)。

しかし、最高の目的は自己聖化なので、それについて考えることは、魔術を理解する大きな手がかりとなるだろう。魔術が効くという体験は、電話をしたり、他のビジネス活動に携わるときに、宗教的な実践として大きな

役割を果たすことになる。セールスの結果は、その人の存在状態の反映なので、失敗すれば、それは「結果にしている」しるしであり、成功すれば、「原因にしている」しるしとされる。電話セールスをするとは、働く人が「心の状態を検査」できることである。かれらは、自分の宗教的な進歩を監視できる。いつも、セミナーで受けた「プロセス」のような訓練を、「結果にしている」人や「依存している」人、また、自分の役割と人格に執着している人々に応用できるのである。

こうしたことに加えて、電話することそれ自体が、「原因にしている」実践の機会を提供する。電話をかける人は、その仕事を自己実現の手段と考える。というのも、ある人がいったように、それは「相手の抵抗や、障壁、また、結果にしている相手の経験を打破する」機会となるからである。トランスフォームされた「プログラムズ」の世界では、話は「禅や電話術」に類するものにみえる。このトランスフォーメーションの術は、自己職業倫理の実践である。いわば、人は自己を電話で呼び「出す」のである。コーが述べるように、「私たちは、自らの内在する偉大

なパワーを生み出すために電話を使っている」のである。「プログラムズ」では、「目標の設定」とその達成はとても重要なものであり、それは「源にしている体験を鮮明にする」のに役立つ。「エスト」は、成功することはトランスフォームの体験であるという見解にも、同じように愛着をもっているようである。「エストの倫理によれば、個人の感じる幸せ（生きていること）は、働く生活を持っていることから生まれ、目標を設定し、それを達成することから生まれる」(Tiplon, 1982a: 211) のである。

こうしたことは全部「プログラムズ」での「資本主義」を奥深いところで強化することになる。外から見れば、魔術自体が結果を生むという見方には同意できないだろう。それより、重労働に導くエートスを教え込むときに、一元論的自己職業倫理が大きな役割を果たしていることの方が、ありそうな話だろう。仕事の強化は、動機づけに関わることである。他の職場でもっと稼げるのに、懸命に電話でのセールスをする主な理由は、仕事「プログラムズ」での「セミナー」の一部だからである。従業員たちは、仕事を通して自己に働きかける。仕事に価値

があるのは、それが究極的な目的に対する手段であるからである。そのため、人々は、これらに関わるものを獲得しようとして、懸命に働くのである。さらにまた、「資本主義的な」結果がどんなに一時的で、はかないものであるうとも、自己聖化に成功しているしるし、すなわち「原因に在る」ことのしるしであるので、価値があるのである。また、従業員たちは、社会をトランスフォーメーションするために必要な商品を生産するということでも、動機づけられる。

最後に、とくに社会心理学から見れば、動機の過程、すなわち、かれらが喜んで一元論的自己職業倫理に帰属しているようには見えないということが注目されるだろう。かれらが懸命に働くのは、宗教的な位階の内て体面と立場を失うことを恐れているからであるといえるだろう。自己宗教は、「プログラムズ」での重要な言葉である「責任」を先鋭化して、「自己」が結果に究極的な責任があるとしてしまう。ビジネスに失敗すれば、それは宗教的な失敗を公けに示すことになるので、人々は争って成功を求めるのである。

五、むすび

これまで、カルトの資本主義の本質をめぐる問題が、さらに還元できる本質をもつものであることを明らかにしてきた。事柄の中心となるのは、資本主義はトランスフォームされるという人々の主張である。功利的価値と目標は、自分のために働き、物質的見返りを満足させながらも、過程を重要なところでは変えずに、自己聖化のダイナミクスに従いながら、自身に働きかけるという点で宗教的価値に譲歩する。その秘訣は、「仕事」を通じて自身を見いだすことと、あつうに理解されている商業的成功を問題にしないトランスフォーメーション的な教え、およびそれに応じて魔術を使おうとすることにある。

いかに「資本主義」が強化されるかについていえば、「プログラムズ」で魔術が中心的役割を担っている一元論的自己職業倫理が、結果を得ようとするための努力であり、それは究極的価値なるものの追求の一部になっていることである。このことは、従業員たちが、個人的な富の蓄積の価値に頼らずに、電話セールスをするために

強く動機づけられている理由を説明する。また、このことは、疎外的、抑圧的な文字通りの鉄の檻と思える職場環境であっても、その環境が、宗教的な関心と一致し、人を向上させるものとして経験される理由を説明する(Tipsonの次の解釈を参照。「献身的な「エスト」修了者にとっては、現世の仕事の意味は「あなたの世界を拡大する」神聖な目的のための手段としてつぐなわれる」のである(1982b: 203))。さらに、こうした説明は、従来の祭り上げられたカルトの資本主義像よりもずっと満足すべき自己宗教像を与えるものと思われる。「プログラムズ」で働く人々は、魔術性と結果を得ることに夢中であるけれども、魔術を単なる人生関心や世俗的野心のためには使えないということを知っている点がとりわけ重要である。

強調されねばならないのは、成功とされること、つまり宗教的目的と「資本主義的」目的の双方の手段として価値があるということに、トランスフォームしたビジネスがいかに関わるかである。内的探究にのみ関心を向ける東洋の伝統とは違って、「資本主義的」目的は、「原因に在る」完全さということと関係し、それは宗教と資本

主義の両方の世界の最高のものを持つることを意味しているのである。内的探究はそれのみにとどまるが、「世間での」成功は宗教的に重要な「目標」であるため、その探究は市場での繁栄と結びつく。人々はカネもうけにはこだわらないかもしれないが、十分カネもうけをするパワーをもつのである。

エアハルトは裕福である。しかし、かれは言う。「私は働いて大金持ちになった。そして、それがどんなに無意味であるかもまったくよくわかっている。カネが伴うところには私は関心がないのだ」(Bryによる引用。1977: 12)。かれにいわせれば、「カネ」は「満足の代わりにならない」のである(1977: 12)。「エスト」で人々が体験する価値は、カネでは測れない(Tipson, 1988: 37による引用)。とはいっても、エアハルトが、資本主義的な目的への関心が、「価値を減じた」とき、すなわち、それが「自己」自身という見地から扱われたときに成功すると教えていたことは、たしかである。つまり、「これまで良かれとされてきた」成功がもはや最高の目標ではなくなるとき、そして、それを捨てたとき、人はあらゆ

るビジネス活動で成功し始めるのである」(Bartley, 1978 : 38)。

読者が、トランスフォームしつつも物質的目標を組み入れるこうしたやり方をどう考えるにせよ、こうした教えは、当事者が自己宗教をどう理解しているかを描き、分析する際には真剣にとらえねばならないものである。冒頭で述べた、ヤッピー向きの宗教にみえたものが、何か他のものと繋がりはじめているといえる。かれらは、ビジネスを肯定することから、(少なくとも利益のためではなく)自らのトランスフォーメーションナルな道のためにビジネス界を経験することへと移行するのである(Wallis, 1984の「世間肯定」運動のカテゴリーを批判したものと見做す、Heelas, 1985を参照)。

「プログラムズ」や「エスト」が唱える、向上や繁栄の神学を分析してみれば、さらに探究すべき多くの事柄が浮かんでくる(Heelasの近刊書を参照)。まず第一に、人々が自己宗教に引きつけられるのは、物質的な利益を求めてなのか、それとも、東洋の精神性を求めて、西欧の唯物論に反発しているためなのかという問題がある

(Harris, 1981を参照)。おおよそのところ、私が研究したいことは、自己宗教に魅せられた人々ではなく、かれらが自己宗教をいかに理解しているかについてである。しかし、自己宗教はビジネス界の多くの人を魅了し、かれらにビジネスを推し進める方法をかなり示してきたという(ことも指摘されてきた)「プログラムズ」についてもっと明確に述べたものとしては、Heelas, 1987を参照)。第二に、職業倫理につながっているビジネスのトランスフォーメーションについて、多くの興味深い問題がある。こうした研究のうちには、自己宗教の努力を、多少ともヒューマニスティックな形での自己実現に基づく努力と比較することが含まれている(たとえば、Adams(ed), 1984, 1986; Evans and Russell, 1989; Ferguson, 1981; Ray and Myers, 1986; Reich, 1971; Roszak, 1981; Yankelevich, 1983を参照)。さらに、自己宗教者がエゴを抑えて資本主義世界の「内部」で働けるようにビジネスをトランスフォームしようとする試みが、永続するものなのかそうでないのかを明確にする研究も必要である。この問題は、商業的意味をもっている。トランスフォームしたビジネスのメンバー

は、エゴが発動しないように懸命に働く。宗教性はビジネス主流の「内部」で開花すべきであり、職業倫理は一元論的多様性(monistic variety)となるべきである。このことは、高いレヴェルでの動機づけに寄与し、その運動は、世界をトランスフォームする活動を財政的に支えるために必要な人員を獲得できるようになることである。職場の世俗化を阻むもの、つまりトランスフォーメーション体験が、物質的価値や貪欲さによって侵食されるならば、「資本主義的」企業やそうした運動への動員は弱められることになる。実際、「プログラムズ」は、一九八〇年代半ばに私が調査を始めて以来、依然として魔術的ではあるが、いっそう伝統的な企業になってきている。近ごろの講話は、神としての自己の話よりも「満足」の話の方が多くなってきた。

最後に、魔術の実践についての疑問があげられる。ここ数十年の間に、西欧では魔術の復活がみられた。宗教性や繁栄につながる魔術の使い方についてみると、自己の限らないパワーを教える数多くのニューエイジの方向性は、「エスト」のような自己運動(self movement)

とどれほど違っているのだろうか(Adler, 1986; および「ニューエイジ・ジャーナル」(New Age Journal)掲載のニューエイジ魔術についての諸論文を参照)。また、「エスト」のような運動で魔術が果たす役割は、魔術に似た心理学的な解釈を唱える人間管理トレーニングや人間の潜在力管理のトレーニングとも比較できる。あるいは、「積極思考(positive thinking)」や「マインド・サイエンス(mind science)」の伝統、原理主義的な「繁栄神学(prosperity theology)」、「テレミック・マジック(thelmic magic)」(Melton, 1983)として魔女運動(witchcraft movements)(Luhmann, 1989を参照のこと)とも比較できるのである。タンヤ・ルーマン(Tanya Luhmann)の説明は、こうした比較に関する興味深い問題を提起するのに役立つ。というのは、彼女の調査の対象者は、自己宗教家と違って、まれにしかビジネスで魔術を使わないからである(1989 : 8)。それから、「研究者からみて効き目がないときに、なぜ魔術が行われるのか」という問題がある。自己宗教は、合理化され技術化された近代の真っ直中に魔術が入り込むことを主張する。トランスフォーメーションナルな

セミナーが、魔術を体験させるやり方を説明するために、心理学的アプローチがたぶんいちばん有効であろうが、人類学的理論もこれを説明するのに役立つのかも知れない (Luhmann, 1989 参照)。

参考文献

- Adams, J. (ed.) 1984, *Transforming Work*, Virginia: Milies River Press.
 Adams, J. (ed.) 1986, *Transforming Leadership*, Virginia: Milies River Press.
 Adler, M., 1986, *Drawing Down the Moon*, Boston: Beacon.
 Bartley, W., 1978, *Werner Erhard*, New York: Clarkson N. Potter.
 Berman, C., 1983, "Cults for Capitalism," *New Statesman*, 8th April, pp.11-12.
 Bird, F. and Wesley, F., 1988, "The Economic Strategies of the New Religious Movements," in Richardson, J. (ed.), *Money and Power in the New Religions*, Lampeter: The Edwin Mellen Press, pp.45-68.
 Bry, A., 1977, *est*, London: Turnstone.
 Erhard, W., 1974 (Sept) "Werner Erhard: All I can Do is Lie," (interview) *East West Journal*.
 Erhard, W. and Gioseia, V., 1977, "The est Standard Training," *Biosci Commun.*, Vol.3, pp.104-122.

Metro, pp.60-80.

Luhmann, T., 1989, *Persuasions of the Witch's Craft*, Oxford: Blackwell.

Main, Jeremy, 1988, "Trying to Bend Manager's Minds," *Fortune International*, Vol.25 (Nov 23rd), pp.77-90.

Melton, G., 1983, "Thelemic Magick in America," in Fichte, J. (ed.), *Attentives to American Mainline Churches*, New York: Rose of Sharon Press, pp.67-87.

Ray, M. and Myers, R., 1986, *Creativity in Business*, New York: Doubleday.

Reich, C., 1971, *The Greening of America*, Harmondsworth: Penguin.

Rhinehart, L., 1976, *The Book of est*, New York: Holt, Rinehart & Winston.

Richardson, J. (ed.) 1988, *Money and Power in the New Religions*, Lampeter: The Edwin Mellen Press.

Rosen, R., 1978, *Psychobabble*, London: Wildwood House.

Roszak, T., 1981, *Person/Planet*, London: Granada.

Tipton, S., 1982a, *Getting Saved from the Sixties*, London: University of California Press.

Tipton, S., 1982b, "The Moral Logic of Alternative Religions," *Daedalus* (Winter), pp.185-213.

Tipton, S., 1983, "Making the World Work: Ideas of Social Responsibility in the 'Human Potential movement,'" in Barker, E. (ed.) *Of Gods and Men*, Macon: Mercer

Evans, R. and Russel, P., 1989, *The Creative Manager*, London: Unwin Hyman.

Ferguson, M., 1981, *The Aquarian Conspiracy*, London: Routledge & Kegan Paul.

Garvey, K., 1980, "An est Experience," *Our Town*, 10/5, March 2nd-8th.

Harris, M., 1981, *America Now*, New York: Simon & Schuster.

Heelas, P., 1982, "Californian Self Religions and Socializing the Subjective," in Barker, E. (ed.) *New Religious Movements: A Perspective for Understanding Society*, New York: The Edwin Mellen Press, pp.69-85.

Heelas, P., 1985, "New Religious Movements in Perspective," *Religion*, Vol.15, pp.81-97.

Heelas, P., 1987, "Exegesis: Methods and Aims," in Peter Clarke (ed.) *The New Evangelists. Recruitment, Methods and Aims of New Religious Movements*, London: Ethnographica, pp.17-41.

Heelas, P., 1990, "The Economic of New Religious Life," *Religion*, Vol.20, pp.297-302.

Heelas, P., "The Sacralization of the Self and New Age Capitalism," in Aber Crombie, N. and Warde, A. (eds.) *Social Change in Contemporary Britain*, Cambridge: Polity Press, (forthcoming).

Legat, N., 1987 (Oct), "Formers: The New Navel-Gazers,"

Press.

Tipton, S., 1988, "Rationalizing Religion as a Corporate Enterprise: The Case of est," in Richardson, J. (ed.) 1988, *Money and Power in the New Religions*, Lampeter: The Edwin Mellen Press, pp.223-240.

Thompson, J. and Heelas, P., 1986, *The Way of the Heart: The Rajneesh Movement*, Wellingborough: The Aquarian Press.

Wallis, R., 1984, *The Elementary Forms of the New Religious Life*, London: Routledge & Kegan Paul.

Wilber, K., 1987 (Oct/Nov), "Baby-Boomers, Narcissism, and the New Age," *Vajradhatu Sun*, Vol.9/1, pp.11-12.

Yankelovich, D. et al, 1983, *Work and Human Values*, New York: Aspen Institute for Humanistic Studies.

Zemke, R., 1987 (Sept), "What's New in the New Age?" *Training*, pp.25-33.

(ペンタスター大学教授)
 (オックスフォード大学東洋学研究所研究員)

〔著者〕 Peter Gee and John Fulton (eds.), *Religion and Power, Decline and Growth: Sociological analyses of religion in Britain, Poland and the Americas*, BSA, Sociology of Religion Study Group, 1991. 著者 Paul Heelas, Cults for Capitalism: Self religions, Magic, and the Empowerment of Business, を誌上したものである。著者の筆名「ボナ」は略した箇名である。——(編集者)